

## 「バッテン」の成立と流布

住 田 幾 子

### はじめに

九州の西半域には、「バッテン」という語が存立している。この「バッテン」は、九州方言の代表的な事象の一つである。

九州方言には、かつての中央語流布の残存事象とされる語が多く認められる。この古語を温存する現象は、九州方言の特性の一端を示している。いっぽう、九州方言内で独自に生起し、なんらかの流布を見せるに至ったと認められる語もある。この現象もまた、九州方言の特性を示すものとなろう。「バッテン」は、後者の典型的な事例である。

「バッテン」は、逆接の接続助詞「けれども」にあたるはたらきの語である。日本語上、特異な表現形の語でもある。

「バッテン」の存立状況を把握し、その成立と流布とをたどることにより、九州方言の特性をとらえたい。

### 一 「バッテン」文表現の諸相

「バッテン」の、文表現にはたらきさまをとらえてみたい。「バッテン」の文表現上の位置に注目して、その諸相を整理してみた。

以下にかかげる文表現例は、自然会話から得られたものである。九州方言会話上、「バッテン」に属するものとして、いくつかの語形態の存立が認められる。これらの文表現例を全体的に見わたしたうえで、用例をとりあげていく。自然会話七、「バッテン」の語尾「ン」は、音が弱まることもある。このばあいは、「ン」を小記する。また、語尾が長呼されることもある。用例中には、こういう現象のものも含まれている。

#### 1 文中表現 ～ 接続助詞としてのはたらき ～

「バッテン」属の語は、文中において、逆接の接続助詞としてはたらく。一文中では、

○イゲストモ ユーバッテ ドーラントモ ユー ナー。 (老女) <福岡・鐘崎>

「いけす」とも言うけれど、「どうらん」とも言うねえ。

注。文例の後の( )内には、発言者の年層・性別を記し、< >内には、県名・地名を記した。

○ワシドモチャー ヒマー ナイトバッテン ツクレパー デグルデス タイ。

(老男) <熊本・五木村>

わたしたち(年より)ともなれば、暇はないのだけれど、つくればできますよ。

○アンタ ゴメンバッテン アレ トッテ。(青女) <福岡・新延>

あんた、すまないけれど、あれを取って。

○コギャン カッコバ シトッバッテン ヨカ ネー。(青女) <熊本・佐俣>

こんな格好をしているけれど、いいかな?

などとおこなわれている。

○モッチャー イカンバッテ ナー。チョット イリヨーガ アル タイ。(老男)  
<福岡・鐘崎>

(この道具は漁に)持っては行かないけれどねえ。ちょっと入用があるのさ。

○サビシューワ アルバッテン フ。タマニワ ヨカー。(老女) <福岡・八女>

(孫が旅行すると)寂しくはあるけれどねえ。たまにはいい。

など、連文じたでの表現も見られる。

○イマー ジュニバ ツカイオルバッテ ハッサクサンニター アゲントバ カオゴ  
タロ モン。(老男) <福岡・八女>

いま銭を使っているけれど、八朔さんにはあんなのを買いたいだろう。

という例は、「いまは使わないほうがいい。」との心意の含まれた表現である。「バッテ」でくられる前件と、後件との逆接関係は、直接的なものとはなっていない。

○キョーノ ジョーカイバッテン ダレト ダレガ キナー 下。(青女) <福岡・新延>

きょうの常会だけれど、だれとだれが来られるの?

なども、後件は、前件に対応する逆接表現ではない。「きょうの常会は、だれとだれが……。」とも言えるものである。直接に表現することを避け、表現を婉曲にしている。逆接表現の表現領域の広さをうかがわせる。

## 2 文末表現

文表現を、「バッテン」属でしめくくるものを見る。

○サンバツ イカニャンバッテン。(老男) <福岡・八女>

散髪に行かないといけないけれど。

○アンタモ サイホー キナハイチ イワスバッテン。(老女) <熊本・五木村>

あんたも裁縫に來なさいと言われるけれど。

など、「バッテン」で文を中止する表現がある。明言されていないが、言外に話者の意が広がっている。つぎのようなばあいも、上の表現に準ずるものとしてあげられる。

○コガ<sup>ン</sup> コト<sup>ワ</sup> ホン<sup>ナ</sup>ゴ<sup>テ</sup> ユー<sup>ギ</sup> イカ<sup>ント</sup>バッ<sup>テン</sup> ネー。 (老女) <佐賀・鹿島>

こんなことはほんと言うといけないのだけれどねえ。

と、文末に「ネー」がそえられた表現である。この文末詞をそえる中止表現もよく見られる。表現をぼかして、相手の心情にうたえているようである。このような表現は、あいさつことばにおいてもよく聞かれ、

○バン オ<sup>ソ</sup>ーシ<sup>テ</sup> シ<sup>ツ</sup>レー<sup>バ</sup>ッ<sup>テ</sup>ン。 (老男) <佐賀・新木場>

夜遅くて失礼だけれど。(夜の訪問辞)

○チー<sup>ター</sup> ウ<sup>ル</sup>イ<sup>ガ</sup> ス<sup>リ</sup>ャ ヨ<sup>カ</sup>バ<sup>ッ</sup>テ<sup>ン</sup> ナ<sup>シ</sup>。 (老女) <福岡・九郎原>

すこしは慈雨が降ればいいけれどねえ。(路上などでのおあいさつ)

などとおこなわれている。

○イ<sup>ソ</sup>ホ<sup>ド</sup> ダ<sup>ン</sup>ノ ツ<sup>ク</sup> モ<sup>ナ</sup> ナ<sup>イ</sup>ト。オ<sup>カ</sup>ノ シ<sup>ゴ</sup>ト<sup>デ</sup> ク<sup>サ</sup>。ア<sup>ン</sup>マ<sup>リ</sup> サ<sup>ワ</sup> ツ<sup>カ</sup>ン<sup>バ</sup>ッ<sup>テ</sup> ネー。 (老女) <福岡・鐘崎>

磯(漁)ほど段差のつくものはないの。陸のしごとではさ。あんまり差はつかないけれどねえ。

は、三文からなる連文じたての表現である。平叙文とは逆の文構造となり、前件(第一文)が、後件(第二文・第三文)に対応するものである。このばあいは、前件が強調されている。

### 3 文頭表現～接続詞としてのはたらき～

「バッテン」属が、文頭にたつ表現を見る。

○ハ<sup>タ</sup>ラク<sup>ゴ</sup>ト イ<sup>ル</sup> カ<sup>ナ</sup>ン<sup>チ</sup>ュー<sup>テ</sup> ネ。イー<sup>マ</sup>ス タイ。バ<sup>ッ</sup>テ コー ハ<sup>タ</sup>ラ<sup>カ</sup>ナ ヤ<sup>ッ</sup>パー キ<sup>モ</sup>チ<sup>ノ</sup> ワ<sup>ル</sup>イ<sup>ゴ</sup>ト<sup>ア</sup>ッ<sup>テ</sup>。 (老女) <福岡・鐘崎>

(年をとって)はたらくことはいるかなんてね。言いますよ。だけど、こう、はたらかないとやはり気もちがわるいようで。

などが文頭表現の例である。第三文の文頭の「バッテ」は、接続詞としてはたらいている。

文頭表現は、

○A イ<sup>マ</sup>カラ ウ<sup>チ</sup> コ<sup>ン</sup> ネー。 (青女) <福岡・大牟田>

↑ ↓ 今から家に来ない?

B バ<sup>ッ</sup>テ タ<sup>ン</sup>ゴ ヒー<sup>ト</sup>ラン モ<sup>ン</sup>。 (青女) <福岡・大牟田>

だけど、(英語の)単語をひいていないもの。

のように、話者Aに対する、話者Bの発言文にもよく見られる。

○モット ヤ<sup>セ</sup>トッタデス ヨ。ソイ<sup>バ</sup>ッテン コ<sup>ア</sup>ゴラ チ<sup>ッ</sup>タ コ<sup>エ</sup>テ。

(老女) <佐賀・鹿島>

(病気の当初は)もっとやせていましたよ。だけど、このごろはすこしは肥えて。

○Aイ<sup>ッ</sup>ケンズタ デ<sup>ヨ</sup>ッタトヤケ。 (老女) <福岡・鐘崎>

↓↑ (漁船が)一軒ごとに出ていたのだから。

Bソ<sup>ー</sup>バッテ オ<sup>キ</sup>ノシマ イ<sup>ク</sup> ト<sup>キ</sup>ワ オ<sup>ヤ</sup>ブネガ コ<sup>ブ</sup>ネ コ<sup>イ</sup>デ イ<sup>コ</sup>ー ガ。

(老女) <福岡・鐘崎>

だけど、沖の島に行く時は親船が子船をこいで行くだらう。

などの例では、「ソイバッテン・ソーバッテ」(それバッテン)が慣用されて、接続詞「だけど」の意を持つ。代名詞のほかにも、慣用例には、「ソギャンバッテン」(そんなバッテン)・「ダ(ジャ・ヤ)バッテン」(だバッテン)など、連体詞、断定助動詞と連結したものが見られる。

もともと接続助詞として成立した「バッテン」属が、接続詞として用いられるようになっていく。九州方言で、さかんに「バッテン」属が使用されたということを示している。慣用句ができていくことも、「バッテン」属の頻用をうかがわせる。

「バッテン」属は、文中表現・文末表現・文頭表現にと、文表現に自在に生きており、逆接表現のかもす意味領域も狭くはない。「バッテン」属の、逆接表現機能の確固としたものであり、文表現上、必要不可欠な語としてはたらいっているさまが見受けられる。「バッテン」属は、九州方言に調和した、新しく開拓された接続助詞、また接続詞であると言える。

## 二 「バッテン」の承接法

「バッテン」属は、体言・用言のいずれをも承ける。「バッテン」属の前接語を品詞ごとに分けて、承接法の特徴をとらえたい。以下に、品詞とその用例とを列举し、逐次、説明を付す。

### 1 体言に承接するばあい

名 詞

○ヤ<sup>ッ</sup>パー カ<sup>ミ</sup>サマバッテ ネ。ア<sup>ゲ</sup>ナ コ<sup>ロ</sup>モ キ<sup>テ</sup> ゴ<sup>ザ</sup>ーケ ネ。 (老女)

<福岡・鐘崎>

(掛軸の絵は)やはり神さまだけどね。あんな衣を着ていらっしやるからね。

共通語的な言いかたをすれば、「名詞・だけれども」と断定の助動詞「だ」がくる。ここに、九州方言の形態上の特色がある。しかし、根源的には、「だ」の表現気分は内在するのではなからうか。

形容動詞の語幹

○シズカバツテン ネー。ナンカ サビシカゴタツ。 (青女) <佐賀・鹿島>

静かだけれどねえ。なにか寂しいようだ。

○イロワ オンナジバツテン オーキサノ チガウ モンネー。 (青女) <佐賀・鹿島>

色は同じだけれど、大きさが違うものねえ。

○コン キモンワ キレーバツテン タコーシテ テノ デーン。 (青女) <佐賀・鹿島>

この着物は綺麗だけれど、高くて手が出ないなあ。

形容動詞には、終止形に承接する用法もあるので、ここで、特に、形容動詞の語幹となるものの例をとりあげておく。

代名詞

○ソヤキ モー ヤッパー ソレコソ アタシダチャ ガタアマヤキ アレバツテ コ  
ッチノ オバーサンダチワ ショーズヤツタトデス ヨ。 (老女) <福岡・雑崎>

だから、もう、やはり、それこそわたしたちは下手海女だから、あれだけど、こ  
っちのおばあさんたちは上手だったのですよ。

○オチャワ ヨカトノ デクルゲナ。ソーバツテン コマカケンデ ウエカエヨル。  
(老女) <福岡・八女>

(家の茶の木は) お茶はいいのができるそうだ。だけど(葉が)小さいので植え  
かえている。

○アイコサン。アイバツテン ニャー。 (青女) <佐賀・鹿島>

愛子さん。だけどねえ。

第一例の「アレバツテ」は、「代名詞・バツテン属」の一般的な用法であるが、第二例の「ソー(それ)バツテン」、第三例の「アイ(あれ)バツテン」などは慣用句で、もはや句全体を一語の接続詞として認めてよいと考える。複合形で接続詞ができてきているということは、「バツテン」属のさかんにおこなわれたことを示している。

副詞

○ホンナ チカーツバツテン ホトキサニ アゲテ クンサイ。 (老女) <佐賀・鹿島>

ほんのすこしだけれど、仏さんにあげてください。

助詞

○アサ ハヨカラバッテン キテー。 (中女) <佐賀・鹿島>

朝早くからだけれど、来てよ。

○モドルトワ ハツカグライバッテン。 (青女) <福岡・大牟田>

帰るのは20日ぐらいだけれど。

○ホンナ オシルシバツカイバッテン タベテ クンサーイ。 (中女) <佐賀・鹿島>

ほんのおしるしばかりだけれど、食べてください。

#### 準体助詞

○キューリョービニワ フトカ ニクバ タビューデ オモトットバッテン。 (青女)  
<佐賀・鹿島>

給料日には大きな肉を食べようと思っているのだけれど。

「バッテン」属に前接する副詞・助詞では、助動詞「だ」がつづくばあいに限られている。これらの副詞・助詞は、名詞に相当するものとしてとらえられている。

#### 連体詞

○ソギャンバッテン シーエン タイ。 (青女) <佐賀・鹿島>

けれど、できないよ。

「ソギャン (そんな)」と「バッテン」とのあいだには、名詞相当のものが内在していると考えられる。

以上のとおり、「バッテン」属は、体言に承接する。体言を見つめてみると、名詞を承けると言ってもよいのではないか。接続助詞の体言承接用法は、特異なものである。しかし、そういうこともできるのが「バッテン」属の本性である。この本性が、九州方言の特性となっていよう。

## 2 用言に承接するばあい

#### 形容詞

○シシューカバッテン トキニワ オーダアツテ ネー。 (中女) <佐賀・鹿島>

かわいいけれど、ときにはやんちゃでねえ。

○サカナナラ シケアゲクガ イーバッテ。 (老女) <福岡・鐘崎>

魚ならば時化あげくが (漁獲は) いいけれど。

形容詞には、イ語尾・カ語尾のものにかかわらず、終止形に承接する。

#### 形容動詞

○キューワ シズカカバッテン リサドンガ クッギー ヤグラシュ ナッ バイネー。  
(青女) <佐賀・鹿島>

## 「バッテン」の成立と流布

きょうは静かだけれど、梨沙ちゃんが来るとやかましくなるわねえ。

○シズカナバッテン ダレガ オンナートヤロー カ。 (青女) <福岡・新延>

(家の中が) 静かだけれど、だれがおられるのだろうか？

○コイト オンナジカバッテン ドガン スッ ネー。カウ ネー。 (中女) <佐賀・鹿島>

これと同じだけれど、どうする？ 買う？

○イッケン ミッギ キレーカバッテン ウモ ナカッター。 (青女) <佐賀・鹿島>

ちょっと見ると綺麗だけれど、おいしくなかったなあ。

形容動詞にも、終止形に承接する。体言承接法の名詞の項にも用例をあげたとおり、形容動詞語幹承接の用法もあるが、九州方言では、形容動詞のばあい、用言承接・体言承接のいずれの用法もおこなわれている。

### 動 詞

○サギャ イクバッテン コン ネー。 (中女) <佐賀・鹿島>

佐賀に行くけれど、来ない？

すべての型の動詞の終止形に承接する。

### 助 動 詞

#### 願 望

○タバタカバッテン コユケケン タベラレーン。 (青女) <佐賀・鹿島>

食べたいけれど、肥えるから食べられないよ。

#### 使 役

○イモートバ イカスバッテン ソッデ ヨカ ネー。 (青女) <熊本・佐保>

妹を行かせるけれど、それでいい？

#### 受 身

○シドーシャガッコーニ イケテ イワルッバッテン。 (青女) <熊本・佐保>

自動車学校に行きなさいと言われるけれど。

#### 可 能

○ソククライノ ジナラ カキキッバッテン ヤッパ コンドウ エンリョスッ。  
(青女) <熊本・佐保>

そのくらいの字なら書けるけれど、やはり (出品するのは) 今度は遠慮する。

#### 様 態 (比 況)

○カエシタゴツアルバッテー ヒョット シタラ カエシトランカン シレン。  
(青男) <熊本・小園>

返したようだけれど、ひよっとしたら返していないかもしれない。

### 継 続

○ウズキヨーバツテ ヤスマンデ ハイリマシタ バイ。(老女) <福岡・鐘崎>

(足が)うずいているけれど、休まないで(海に)入りましたよ。

### 断 定

○ヤバツテ マー シケー アワジン カエツテ キタデー ヨカッタナー  
しかし まあ しげに あわずに 帰って 来たから、 よかったねえ。

【全国方言資料第九巻】(NHK編 日本放送出版協会 昭和42年)からの引用。(P. 350 老女・鹿児島県薩摩郡上飯村中郷)

断定の「ダ・ジャ・ヤ」に承接する用法がおこなわれる地域は限られているようである。五島列島・甌島・屋久島・種子島などの島嶼部に、その用例が見える。福岡県下・佐賀県下・熊本県下などの用例は得られていない。

### 丁 寧

○ソーユー ハナシワ アッタデスバツテ ジッサイ ソレガ ソレニ オータチャー  
モナ オランダス ナー。(老男) <熊本・五木村>

そういう(河童の)話はありましたけれど、じっさいそれが、それに会ったという者はいませんなあ。

○ガゼトモ イーマスバツテ ネー。(老女) <福岡・鐘崎>

(「うに」は)「がぜ」とも言いますけれどねえ。

### 尊 敬

○イマ ナンニンカ ケーキノ イー ヒトガ ハイリヨンスアルバツテ ナー。  
(老男) <福岡・鐘崎>

いまは幾人か元気のいい人が(海に)入られているけれどなあ。

### 過 去

○ソージャ シタバツテン アシャー マックロケー。(青女) <佐賀・鹿島>

掃除はしたけれど、足はまっ黒け!

### 伝 聞

○モー フツーン ヒトワ イチシカンバカリデ イキナルゲナバツテン ワシガ ム  
スコワ ヤツパ イチシカンニジュッペンバカリ カカッテ。

もうふうの人は1時間ほどで行かれるそうだけれど、わたしの息子はやはり1時間20分ほどかかって。

### 意志・推量

○ハヨ アガローバツテ モー アガッテ チート マツバラマデ イタラ。(老女)

<福岡・鐘崎>

早く(陸に)あがろうとしてあがったけれど、もうあがってちょっと松原まで行ったら。

○イクトワ イコ<sup>バ</sup>ッテン アトワ シラン ヨ。 (青女) <熊本・佐俣>

行くのは行くだろうけれど、あとは知らないよ。

「イコ」は、「イコー」(行こう)の長音が縮音化したもので、「イコ」には、「う」が内在している。

打消推量

○ソギャン ユータラ イケマー<sup>バ</sup>ッテン。 (青女) <熊本・佐俣>

そんなに言ったらいけないだろうけれど。

打消

○ミミモ カマシヨ<sup>ラ</sup>ン<sup>バ</sup>ッテ ナー。 (老男) <福岡・鐘崎>

耳も(栓を)つめていないけれどなあ。

「バッテン」属は、どの助動詞にも承接し、その終止形を承ける。

以上のとおり、「バッテン」属は、用言の終止形にも承接する。「けれども」は、用言の終止形承接をおこなうが、「バッテン」属も、その承接法を具している。

### 三 「バッテン」の成立

「バッテン」については、旧来、

「……ばととも」の早口 (柳田國男「國語の将来」『國學院雜誌四十五卷五號』昭和14年)

「行けばととも」「見ればととも」 (同「日本方言學會の創立にあたりて」『方言研究二號』昭和16年)

であるとの説がある。私も、ひとまず、「ばととも」の指摘をふまえる。しかし、「行けばととも」の「ば」は已然形を承ける。「バッテン」の特性としては、名詞承接の用法がある。この名詞を承けるということを手がかりにして、「バッテン」の成立について考察してみたい。

九州方言には、「をば」の「バ」が存立している。「バ」は、準体助詞「ト」を承けて、

○ヤット デキタト<sup>バ</sup> トーシテ スグ コラス トネ。 (青女) <熊本・佐俣>

やっできたのを、どうしてすぐこわすの。

などと逆接的な表現をかます。「バッテン」の逆接表現と名詞承接法とから、「バッテン」の「バ」は、「をば」の「バ」であろうとの推測をしてみてもよい。「バッテン」が準体助詞に承接する表現には、

○ウチノ シーチャンナラ ワカルトバッテン ワタシジャ ワカラン モンネ。

(青女) <熊本・佐保>

家のおじいさんならわかるのだけれど、わたしではわからないものね。などの例がある。この文例を見ると、「おじいさんならばわかるものを。といっても、わたしではわからない。」という意味あいを受けとられる。「バッテン」には、「とても」の意が含まれている。「バッテン」が、「ばとても」の早口というのはうなずける。

以上の考えから、「バッテン」は、「をばとても」であると推察する。「バッテン」が、九州方言の「バ(をば)」を母体にして生起した語であることが知られる。

「バッテン」の頻用は、さらに「バッテンカイ」「バッテンガラ」などの語を生起させる。九州方言には、「ドンカラ」(逆接「けれども」)、「ケンカラ」(順接「から」)など、助詞「から」が累加された強調形が存立している。「バッテン」にも同様に「から」が累加されるに至っている。「バッテンカラ」属の、文表現上にはたらくさまは、「バッテン」属のものと同様である。

#### 四 「バッテン」の流布

##### 1 「バッテン」の語形態と分布

「バッテン」に類する語の語形態と、それらの分布状況とを把握したい。

臨地調査資料に加えて、九州方言の全体相を見るために、『九州方言の基礎的研究』(九州方言学会編 風間書房 昭和44年)所収の言語地図「逆接『けれども』」(P. 172)と『全国方言資料』(第六巻・第九巻 昭和41・42年 前掲)の談話資料とを参照する。

方言会話上にあらわれる「バッテン」属の語形態では、つぎのようなものが得られている。(「バッテンカラ」属も併記する。)

バ ッ テ ン 属	バ ッ テ ン カ ラ 属	
バッテン	バッテンカイ	バッテンガラ
バッテーン		
バッテナー	バッテンカー	バッテンガー
バッテン		
	バッテンカ	バッテンガ
バテン		バテンガ
バッテ	バッテカー	
バッテナー		
	バッテカ	バッテガ
バッチェン	バッチェンカ	
バッチェ		
バッチェナー		

「バッテン」の成立と流布

バッチ バッチー	バッチカ	バッチガー
バチ		バッチガ
バッ	バッカイ	

「バッテン」属は、ほぼ九州西半域に分布している。西半域とは、福岡県下筑前筑後域、佐賀県下、長崎県下（五島列島・壱岐・対馬などの島嶼部を含む）、熊本県下、鹿児島県下南端域と甑島・屋久島・種子島などの島嶼部、大分県下日田地域（筑後につづく地域）宮崎県下南端の串間市域などの地域である。九州東半域には流布していない。九州方言内の東・西の二大分派様相が見とられる。九州西部方言内でも、「バッテン」は、とりわけ、肥筑方言に濃いものようである。

「バッテン」属の分布状況を、語形態ごとに見ていく。

バッテン・バッテ

「バッテン」は、九州西部「バッテン」分布域のほぼ全体をおおう。（屋久島・種子島をのぞいて）「バッテ」は、「バッテン」の末音「ン」が脱落した形態の語であるが、「バッテ」と「バッテン」とは併存する地域が多い。「バッテ」が優勢すると見られるのは、福岡県下筑前筑後域、佐賀県下周辺域、長崎県下周辺域と島嶼部域、天草・甑島の島嶼部域などである。

バッチェン・バッチェ

「バッチェン」は、屋久島と大分県下日田地方とに見える。「バッチェ」は、屋久島と長崎県西彼半島のつけ根の地域に分布している。

バッチ

「バッチ」が、壱岐、平戸島、五島列島の小値賀島、西彼半島のつけ根のあたり、長崎半島の末端地域、屋久島、種子島、宮崎県串間市域に分布している。「バッチ」の分布は、九州西部域内での周辺分布の様相を見せている。

バッ

「バッ」は、薩摩半島・大隅半島の南端域に、まとまりのある分布を見せている。

2 「バッテン」の進展・後退の状況

「バッテン」属の進展状況は、佐賀県下南半域、長崎県下中央域、熊本県下南端域、鹿

児島県下南端域などにおいて見られる。これらの地域では、「バッテン」が、「ドン」をしのぐ勢いを示している。

佐賀県下鹿島市域では、“「バッテン」はていねいなことばであり、「ドン」はむかしのことばである”との認識がある。老年層・中年層では、“親しい人に話す時は「ドン」を使うが、ていねいに話そうとする時は「バッテン」を使う”ということである。青年層では、“「ドン」は古めかしいことば”であると意識されている。

『九州方言の基礎的研究』の熊本県下についての記述にも、

逆接は老少ともにバッテンが全県的に基本的であるが、球磨・芦北の老年層には～ドンがあり、本来はこの方が盛んであったらしいが、現在では老年層でも急速に衰えて、バッテン専用に近い状況を呈するに到った。(P.234)

とある。長崎県下についても、「長崎県西彼杵半島方言の接続助詞「から」「けれども」について」(上野智子『広島大学文学部紀要第39巻』昭和54年)に、西彼杵半島での「バッテ」の進展状況に関する記載がある。鹿児島県下は、先編の『九州方言基礎的研究』所収の言語地図によると、島嶼部を除くほぼ全域に「ドン」が分布している。しかし、県下の南端域と島嶼部とに見られる「バッテン」属は、他県の状況から予想すると、今後も進展していくものと考えられる。

「バッテン」属の後退状況は、福岡県下筑前の北端域に見られる。筑豊地方と呼ばれる地域内の、筑前に属する鞍手郡長谷地区では、老年層でも、

○ムカシノ ハナシケド ネー。(老女) <福岡・長谷>

むかしの話だけどねえ。

などと「ケド」が聞かれ、「バッテン」は聞かれなかった。長谷よりもやや筑前内部に入る鞍手郡室木地区では、「バッテン」「バッテ」が聞かれる。このあたりでは「ケド」も使われている。しかし、青年層でも、日常会話上、「バッテン」「バッテ」がおこなわれており、「バッテン」属の後退の速度は急なものではないようである。

「バッテン」属の進展状況・後退状況ともに、今後の動向が興味ぶかく思われる。観察をつづければ、九州方言の動態相をとらえることができよう。

## おわりに

「バッテン」は、九州西部方言内で成立し、流布した語であると言えるが、たとえば、形容語のカ語尾も九州方言に特有のもので、やはり九州西半域分布を見せている。九州方

「バッテン」の成立と流布

言に特徴的なものは、主として九州西部方言に存立していると思われる。これらは、「バッテン」の本性と通いあうものを有しているのではないか。「バッテン」の本性を究明するためには、関連する事象の総合的な考察が必要である。このことについては、今後の課題とする。

調査地名・調査年月

福岡県鞍手郡鞍手町新延	昭和年月 56. 7	福岡県八女市柳島	昭和年月 55. 8 56. 7
〃 長谷	57. 7	三池郡高田町北新開	54. 8
〃 室木	56. 10	大牟田市大字歴木	56. 7
宗像郡玄海町鐘崎	51. 12 52. 10	佐賀県東松浦郡肥前町新木場	54. 8
嘉穂郡筑豊町内住九郎原	56. 10	鹿島市浜町	56. 7
粕屋郡篠栗町城戸	56. 6	熊本県阿蘇郡小国町黒淵	55. 9
〃 志免町志免	54. 8	下益城郡中央町佐俣	55. 6
柳川市矢留本町	55. 8	球磨郡五木村	56. 7